

たけべアメージングストーリー

第一話

*主な登場人物

建部 鮎太(あゆた) 建部に住む、中学一年生の少年

建部 さくら 鮎太の妹、小学五年生

河本 温人(あつと) 鮎太の同級生

建部 鮎一郎 鮎太の父 岡山の大学の教授

建部 すみれ 鮎太の母

建部 鮎男 鮎太の祖父だが亡くなっている

建部 桃江 鮎一郎の母、鮎太の祖母

日船上人 不受不施を説く、日蓮宗の高僧

腰折れ富蔵 盗人だが、やさしい気性の持ち主

楓(かえで) 鶴田城の姫君

竹内老翁 竹内流武術を開眼した剣の達人

池田 長尚 池田家家老の嫡男

塩屋十兵衛 中田新町の塩屋の息子

プロ
ロー
グ

「大
田ト
ンネ
ル」

僕の名前は建部 鮎太、建部中学校の一年生。

住んでいる所は岡山市北区建部町福渡。家族は両親と小学五年の妹の4人。三年前、旭川沿いにある、おばあちゃん家の隣に新しく家を建てて越してきた。それまでは、市内にある、お父さんの勤務先の大学の寮にいたんだけど、おばあちゃんが、転んで足を怪我したのをきっかけに、戻ることになったんだ。

友だちに言ったら、「へえー、そんな山の中じゃあ、きつと、ケイタイ、通じないよ」って、バカにされた。でもしよすがないよね、僕だって、どうしてここが同じ岡山市なのか、わかんないもん。まあ、ケイタイはつながるけど。

おばあちゃんの家は今はやってないけど、もとは旅館で、何でも以前は町内で指折りの宿とかで、繁盛していたんだって。お父さんもよくは覚えていないそうだから、だいぶ昔の話だと思う。

おじいちゃんは、僕が生まれる前に、交通事故で亡くなったって聞いている。

若い頃のお父さんは、そんな、あんまりお客の来なくなった旅館を継ぐ気はなくて、大学に残り、それからメダカの研究に没頭している。でも、本当に夢中なのは、釣り。それも、アユ釣り。

僕の名前が、どうして「鮎太」なのか、それで分かるよね。お父さんも、おじいさんも、ひいおじいさんも、みんな「鮎」の一字が付いているんだって。もう、そんなの、ちっとも嬉しくないよ。友だちの温人あつとに話したら「オレも似たようなもんだ」って。温人のおじいさんは毎日、八幡温泉の水を汲みに行くほどの温泉好き。で、初孫に「温湯あつと」ってつけたらいいと言つて、でも回りが反対して、それで結局この字に落ちついたんだって。どこの大人も、自分の趣味を子や孫に押し付けるもんなんだね。

でも、僕のお父さんも自分の名前が嫌いだったって。だから、おじいさんが生きている頃は、アユ釣りなんかしなかったんだって。それが、亡くなつてから、急におじいさんの竿を持ち出して、やるようになったって。そんなこと言うと、僕もいつかそうなるのかなあ。今度、温人に聞いてみよう。そうそう、僕が転校して来て最初に友だちになつたのが、この河本の温人。

温人のお父さんと、僕のお父さんが同級生で、今も一緒に釣りに行く仲間だから。僕は、たまの休みの合う日には、温人の家の4WD車で川や溪流に連れて行かれる。

それと、温人のお父さんが市内で教えている剣道に二人で通っている。最初は温人の方が腕は上だったけど、今はちよつとだけ僕の方が強くなった。もうすぐ初段に挑戦するつもりだ。僕はいつも一緒にいるので、他の生徒からは「建河（タケカワ）コンビ」と呼ばれている。

そんな、いつものようにつるんでいたある日、温人から聞かされた不思議なできごと。家からすぐの国道五三号線にできたトンネル。「大田トンネル」って言うんだけど、そこで起きた話。近所のアパートに住む、おじいさんと、フクちゃんと言う名の犬を飼っているんだけど、一ヶ月ほど前、夜中にフクちゃんが表に向かって、急にワンワン吠え出したんだって。それで、おじいさん、シッコでもしたのかと思って、外に連れてったんだ。

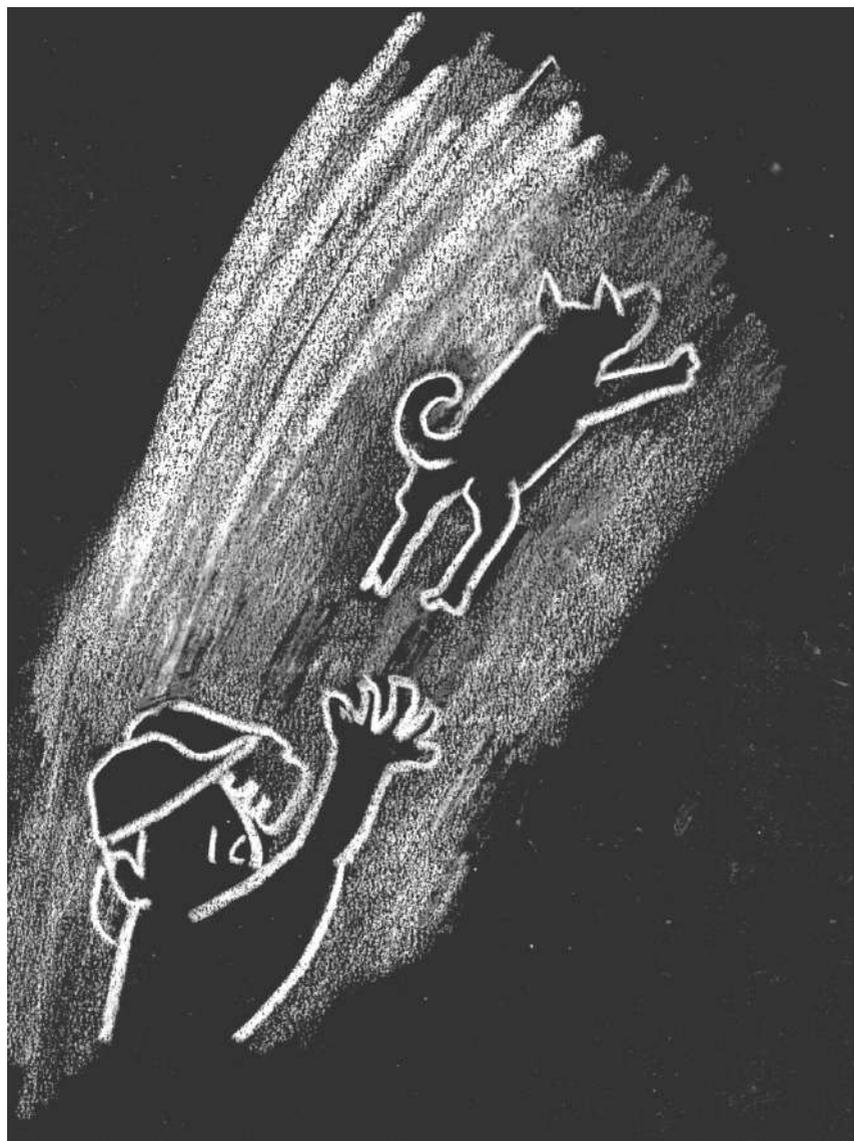
そしたら、フクちゃんはぐんぐん前へ歩き出して、いつもは行かない五三号の方に向かってたんだって。おじいさんの話だと、フクちゃんは水が嫌いで普段から側を流れる旭川近くには行きたがらなかったのに、この時は違って、それで三本松のあたりに来た時、いきなりガーって走り出した。おじいさんはやっとの思いでついていって、そのまま大田トンネルまで来たんだって。

中に入っても、力いっぱいおじいさんを引っ張って進んで、やっつと真ん中あたりで立ち止まったんだ。おじいさん、ホツとして、腕時計を見ると、ちょうど午前0時になるとこだったって。

そのとき、前の方から、ものすごいスピードでバスのような乗り物が、ゴーンという音と、青色ダイオードの何千個分かと思えるほどのヘッドライトを照らして、向かって来たんだって。

おじいさん、もう、目が開けてられなくて、ウワーッと腕を上げて顔を覆ったんだ。気がつく
と、おじいさんの手にはロープだけがあつて、さっきまでいたフクちゃんはいなくなつていた。
おじいさん、「フクヤー、フクー」って呼んで、向こうの出口、後ろの入口と探したんだけど、
それっきり、フクちゃんは、消えてしまったんだ。それ以来、おじいさんは部屋に閉じこもつ
てしまい、その時にしていた時計も、フクちゃんの小屋の毛布の上に置かれたままだつて。

これって、あれかなあ、前に図書室で借りて読んだことのある「タイムトンネル」。地球上に
は、時間を超えた空間が存在していて、その隙間に入ると、別の時代に行つてしまい、二度と戻
れなくなる。フクちゃんも、そんな別の時代に迷い込んでいる……。



9月23日。フクちゃんがいなくなったのが3月21日だから、ほぼ半年が経っている。僕の腕には、フクちゃんの小屋から、こつそり持つて来た、おじいさんの腕時計がしてある。2つの秒針は、ぴったり、真上の12で重なったままだ。僕はこの時を奇妙な自信を持つて迎えた。きつと、この日に違いない。

幸い今日は、お父さんもお母さんも恩師の人の受賞パーティとかに出席して、帰りは深夜、遅くなるって。そのため、晩ごはんを作り、おばあちゃんが来てくれている。

おばあちゃんは足が良くなってからは、自分の家で前と同じように、ご飯もお風呂も一人でやっている。結婚前は看護婦さんをやっていて人を助けるのが仕事だったので、自分が助けられるのは嫌なんだって。夢はナイチンゲールのように人を救うことだったので、おじいさん一人救えなかったよって、よくこぼしている。

僕は、おばあちゃんが、テレビなんか見ないで、早くお風呂に入って寝なさいよって、声をかけて帰ったのを確かめると、すぐに行動を開始した。

妹のさくらの部屋の電気は消えている。夕方、テレビでマララさんのニュース特集を見ていて、急に「さくらもノーベル賞をもらう」って言いだした。おばあちゃんから「さくらは勉強するより、男の子と喧嘩する方が好きなんだから、これから大変だね」と言われると、

「もう、おばあちゃんは何で、さくらが男の子と喧嘩ばかりしているように言うの。おにいちゃんには言わないのに、私だって、いつか世界の人を助けるんだ」と、部屋に入り込んだままだ。いつのまにか眠ってしまっている。

温人とは五分前に現地集合って約束してある。

でも、あの家、お父さん警察官だから、けっこうきびしいかも。

机の上の目覚まし器がピピッと鳴った、11時。と、同時に僕の左腕に振動が。おじいさんの腕時計が動き始めた。しかも、いつのまにか、針が11時に戻って。

おかしいなあ、お父さんがこっそり直してくれたのかなあ。

僕は「TAKEBE」のロゴの入ったトレーナーを着ると、前もって用意してあった非常用リュックを背負った。中には、東日本大震災で役立ったと言われている懐中電灯、水のペットボトル、キズパワーパッド、おとうさんがシンガポールに出張したときに何にでも効くと聞いて買ってきたタイガーバームに方向磁石、ライター、ボールペンと紙、カバヤのキャラメル、カルビー

ポテトチップス。ケイタイは学校で夜9時から使用禁止になったし、お母さんなんかから掛つてきても面倒なので置いていく。

よし、これだけあれば、たとえ森で遭難したって1日か2日ならどうにかなる。

以前、建部にある「めだかの学校」のサマースクールに家族で参加して、たけべの森に入ったことがあるけど、その時、「ドングリコンテスト」で誰よりも大きいドングリを拾おうと、夢中になっているうち、皆から離れてしまった。振り向いて、来た道を探したけど、笹や灌木で、どこを歩いたのかもわからない。上を見ると空ものぞめないほど、木がおおっていて、ああ、僕は、このまま、ずっとここから出られないんだ、そう思ったら、急に不安になって夢中で駆け出していた。そうしたら、ドスンと人にぶつかって、お父さんが「ほら、危ないだろ、そんなに駆けちゃあ」と笑いながら、立っていた。僕は泣き出しそうになったけど、お父さんのお腹を何回もこぶしてパンチして我慢した。そんな怖い思いをしたから、準備だけはしっかりとした。

11時40分、腕の時計もしっかり動いている。僕はお気に入りのナイキのスニーカーを履くと、玄関を出た。家から大田トンネルまでは、歩いて10分とかからない。

空には、ひしめき合うほどの星。岡山の市内に住んでいた頃は、半田山にでも登らない限り、星なんて観えなかったのに、今では毎日がプラネタリウムだ。

五三号をそのまま岡山方向にむかって歩く。夜遅いせいか、車の音がほとんどしない。聞こえるのは、そばを勢いよく流れる旭川の水の音。先週の台風の大雨で、ダムが放流が続き水量がぐんと増えていると、お父さんが言っていた。この調子だとまた幸せ橋が流されるかもしれない。幸せ橋は人が渡るだけの木造の橋なんだけど、これまでも三度流されて、そのたびに修復されてきている。もうダムがあるけん、旭川はおえんと言うのが、お父さんの口ぐせだ。

このあいだも、河川敷の大掃除の回覧が回り、行ってみると水が臭く匂って、どうしようもなかったって。おまけに、岸も中州も林のように生い茂っていて、なにに集まったのは自分が一番若いくらいで、ほかは七十歳以上の年寄りばかり、こんなんで、どうやって川をきれいにするんだって。それと、みんな帰ったあと、草刈り機が一台、残っていて、これを忘れて気づかないくらい年とった人らが、ここを守っているんだから、もう時間の問題だなあって。

時間は11時50分。大田トンネルのオレンジ色の明りが見えてきた。予定より少しかなかった。じつは僕が確信をもって、この日と決めたのには訳がある。と言っても大した考えじゃない。

フクちゃんがなくなったのが3月21日、春分の日。春のお彼岸とも言うらしいけど。最初、数字を浮かべて、3、2、1で、0時スタートみたいなことで謎解きしてみたけど、どうも、ピンとこない。で、ふと思ったのが、また、戻って来るんでは？

そのバスのような乗り物が津山の方に向かったのなら、いつか、岡山の方角に帰って来る、そんな気がしたんだ。それも、頻繁じゃあなくて、一年に一回、往復しているような。だとすると、ほぼ半年後の今日、秋分の日。これも、秋のお彼岸とか言うらしいけど。

トンネルの中に入り、そのまま左側にある自転車も走れる広い歩道を進んだ。

このトンネルは二年前に、建部町の岡山と津山を結ぶ国道53号にできた長さ五百八十メートルのトンネルだ。それまでの国道は山の西側にあり、迫る山と川の間をギリギリに走り、落石もあるような危険な道路だった。人が自転車なんかで通行しようとするとな命がけだと言われた。だから町の人は、早くできて欲しいと言っていた。

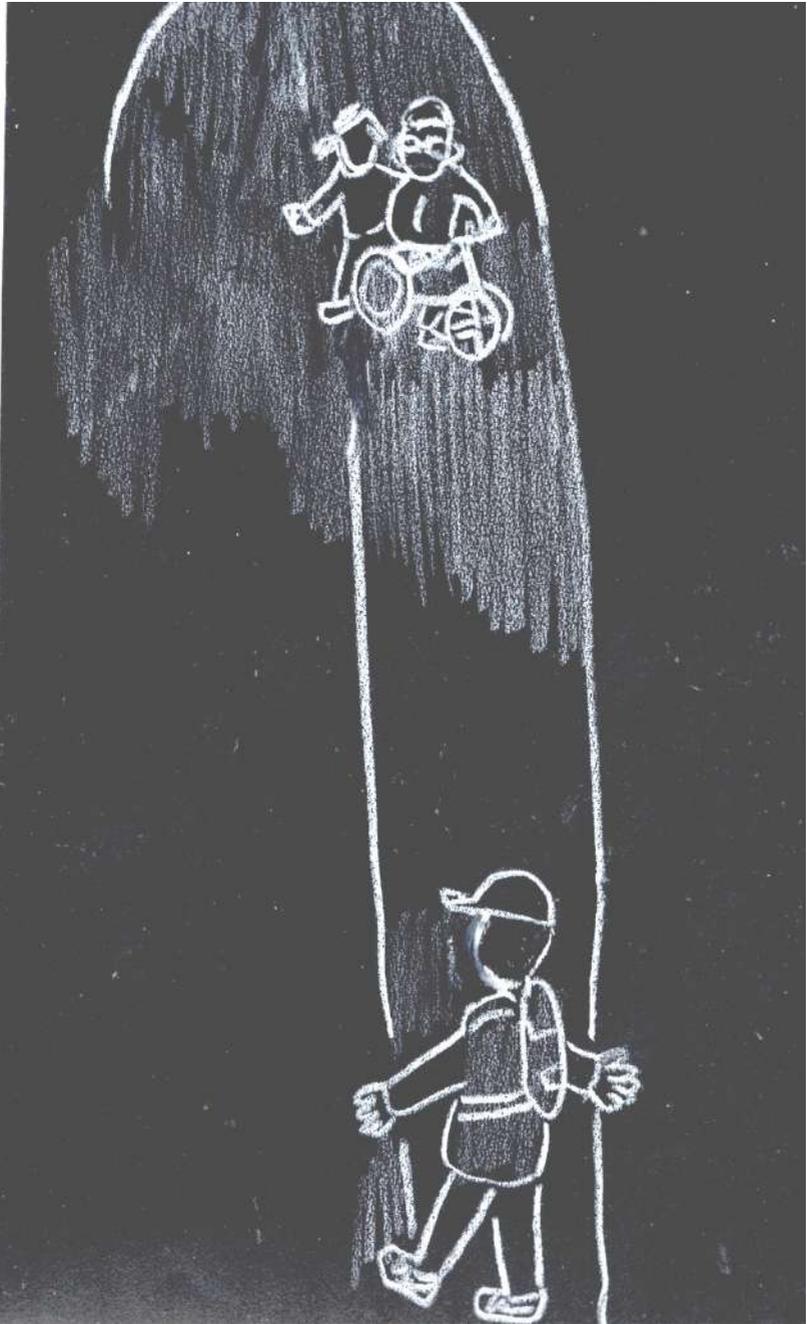
開通式というのがあって、その時は学校中の生徒が呼ばれて行った。建設省の部長さんという人が、工事の写真や掘削機械を見せてくれながら色々説明してくれた。「山の重みでトンネル

がつぶれないのは何故だかわかりますか？それは、上からの重量を計算して、それに耐えられる円形の構造にしてあるからです。みんなが学校で勉強している、算数とかが役に立つんですよ」
終わり頃に、最後に貫通した時に石の破片をおみやげにくれた。何でも「意思(石)貫通」と言っ、持っていると、受験合格とか願いがかなうお守りだとか。僕はこれだけ算数ができる人でも、石の魔力を信じているのがなんだかとてもおかしく思えた。

百メートルほど行くと、非常用電話の前に来た。もし何かあったら、これを使えばいいと思っているけど、でも、これって、だれとつながるのだろう？

後ろを向くとまだ入口が見える。この先、カーブでそれも隠れる、その手前まで進もう。そう考えた時、人が来た。温人だ、チャリを押して、え？その後ろから、もう一人子どもが・・・

「やい、やい」



「鮎太！ 家の前でさくらちゃん、探してたよー、仕方ないからいっしょに来たよ」

「もう、おにいちゃん、急に玄関を開けていなくなるから。さくら、お母さんから、おにいちゃんのこと、何かしそうだから、よく見張ってねって言われてたんだよ」

慌てて追いかけてきて、パジャマの上からパーカーを着て、靴は素足のままだ。

しょうがない、今、追い返してお母さんに告げ口されてもやっかいだし、どうせ、0時になっても何も起きやしない。

三人で更に五〇メートルほど、どうにか入口が見える位置まで進み、並んで壁にもたれ、じつとしている。さっきから不思議なほど車が通らない。もし、1台でも通りかかれば、こんな時間に子どもが歩いているなんて、と警察に通報されている。温人のお父さんが聞いて、それが自分子どもたちだと知ったら大目玉だ。

時間は11時57分。今、気づいたけど、1分って、こんなにも長いんだ。それが3倍・・・、ハァー、何でこんなことしようと思ったのだろう、今ごろ後悔しても遅いけど。

11時59分。背が低くて分厚いメガネをしている温人が、僕の腕時計をのぞき込むようにして見ている。温人は歴史好きで、何でも古いことを知りたがる。二十年前に作られた「建部町史」という本だってほとんど暗記するほどだ。

僕は地理に興味があるから、二人で今、建部の地理と歴史を書いた「建部なんでも大百科」を作ろうとしている。その本を出すために「建河出版社」も設立した。今日の計画を話したら「ほんとうに昔に行けたら、すごい本ができるよ、鮎太」とすぐに乗って来た。

後、十秒。たしかにホントにホントならすごい、でもそんなこと起こるわけがない……。

五秒、四、三、二、一……。